
魔法先生ネギま！～鋼の戦士～

派遣社員

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜鋼の戦士〜

【Nコード】

N4013S

【作者名】

派遣社員

【あらすじ】

普段通りの日常を歩もうとしていた俺に最大の試練が降りかかった。理不尽な事からもといた世界が遠き過去へと変わり、俺は無数の新たな世界へ旅立たされる事に。で、新たな世界は、『魔法先生ネギま！』の世界！？いいだろう、神様に貰ったこの力で、俺はこの世界で生き延びて見せる！！

1この物語は、駄作者が自堕落なせいで超不定期更新となっているわん。ご注意してねん。by漢女・貂蟬

2 こんな駄文を見る人はそうはおらんと思うが、見る者が居るならば注意するが良い。この作品は妄想分が過多じゃ。キャラを壊したくない、汚されたくないと思う者は直ぐにバックせい。by東方不敗

3 この駄作を読んでくれる皆！警告しておくぜ！！これはアンチネギをアンチする内容になってしまふ予定らしい。それらが嫌なら、即バックしてくれ！！見てから不快になったって俺は責任を持たない！by華陀

プロローグ

あ…ありのまま　今　起こった事を話すぜ！

『朝起きて着替えて飯食ってさあ出掛けようと靴を履いて外に出たら、

周囲は白一色の何も無い変な場所にいた。』

な…　何を言ってるのか　わからねーと思うが、俺も何をされたのか分からなかった…

頭がどうにかなりそうだった…

瞬間移動だとか超スピードだとか、

そんなチャチなもんじゃあ　断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。

思わずポル○レフになってしまった俺は絶対に悪くないと思う。が、勿論自分自身はこんな処知らないし、知らない以上誰かに連れてこられたと考えるべきである。が、こんな場所多分地球には存在しない。という事は……。

「宇宙人にさらわれた? …… 馬鹿馬鹿しい。それこそねえか」

自嘲気味に呟く。自分でボケて自分でツツコミいれるとかはたから見なくてもイタイ奴だが、いきなり見知らぬ場所に連れて来られて周囲に誰も居なければこうもなると思う。取り敢えず、俺を連れ去った奴にせよなんにせよ生物を探さないと、ずっとこんな所に居たら気が狂ってしまうかもしれないと思い、周囲を見渡しながら、声を張り上げた。

「誰か居ないかー!!」

誰も居ないようだ。しかし、諦める訳にはいかない。幾ら俺が結構な不幸体質でいきなりの拉致とかに慣れているとは言ったって、幾等なんでもこんなのは初めてである。不安以外の何者でもない。

その後、ずっと人影を求めて探し回っていた。一度眠気に負けて不安ではあったが我慢しきれずに寝てしまった(多分2〜3時間位か)事もあったが。全然人が見つからずもう諦めようかという時に、ふいに後ろから声が聞こえてきた。

『ふむ、やっと見つけた』

俺は歓喜して後ろを振り向いた。そしてずっと全力で引いてしまった。そこにいたのは何が何やら分からないモノだったからである。宙に3つの眼球の様な黒い塊を浮かべ、黒い霧のような気もすれば謎の怪物のような形を取り、次の瞬間には霧散して美しい女性のような姿だったり、顔が見えない存在だったり、全く持って意味不明なおぞましい雰囲気でありながら、或る意味荘厳な雰囲気も混在するような存在。そりゃ、引く。MADな科学者以外で、引かないような人間が居るなら見てみたい。見た瞬間発狂したり、汚物を

漏らしたり、泣きださないうで居られた事を褒めて欲しい位だ。……
そんな存在。

多分今の俺を他人が見たなら、直ぐに病院に行く事をお勧めしてくるだろう顔である事は間違いないと思う。俺の顔色は今、恐らく真っ白だろう。実際、髪が白くなっているだろう事が、目に掛かる白い髪の毛で分かる。そんな存在は盛大にあとずさった俺を見て、意外だなと云う様な目線で俺を見た。

『ほう。この空間に生身で長時間存在出来、我を直視して狂気に飲まれず、それどころかその場に硬直もせず、即座に後ろに下がるだけの精神を持っているか……。異質かつ脆弱な気配を感じて散歩がてら様子を見に来たが、能力持ちの人間とはな。良い暇つぶしの道具を見つけた』

姿を、顔の见えない男に固定化した存在^モは、そんな事を言い出した。俺は内心逃げ出したい気持ちで一杯ではあったが、話し掛けて見る事にした。何故なら、此処が何処なのかこの存在なら知っているかもしれないと思ったからだ。

「すみません、此処は何処で、……貴方は一体どういった存在なのでしょうか？」

黒い眼の様なものがこちらをギロリと睨みつけてくる。はつきり言って怖すぎる。

『ふむ、更に我に話し掛ける気概まで持つとは、気に入った。褒美にその質問に答えてやろう。……此処は生きとし生けるものが魂だけになって神格化してから初めて来られる場所……。汝等人間に解りやすく云えば、神界だ。そして我は汝等人間が解り易いように言

うならば、神々の王という存在にあたる』

どうやら先の眼はただこちらを見ただけのようだ。怒っている訳ではないらしい。口調は至って平坦だ。俺は思い切って聞いてみた。

「どうにかして元の世界に帰れませんか？」

『無理だな。何故なら既に汝の住んでいた世界は3億5千万年が経っており、人は住んではおらん。出身世界が悪かったな。あの世界は極めて時の流れが早い。更に此処は時の流れが他と違いほぼゼロだ。此処で1時間経てば汝等の世界では1千万年が経過する。そして、汝が入ってから既に35時間が経過している。時というのは万物に平等な物だ。それは神々といえど覆せん』

即答で最悪な答えが帰ってきた。つまりは例え此処に来てから3分くらいで帰れたとしても元の時代には戻れないという事である。計算すれば、約50万年経っているということなのだから。何と言う一方通行タイムマシン。軽く絶望した。親兄弟親戚恋人友人はいない身だからまだ良いだろうけど。

いや、まあ、良い暇潰しを見つけたといっていたし、例え先の言葉が覆ったとしても帰して貰えるとは思わんけれど。

『ふむ、その通りだ……。話が早いな。という訳で、だ。汝には我を楽しませて貰う』

「えっと、私目に拒否権等は御座いますでしょうか……？（心を読まれた、だと）」

『我という存在がそんな物を認めると思つか……？』

「心の底から認めると信じたいと思い……いえ、すいません。認める訳ないですね。調子に乗り過ぎました。ですからその切っ先が尖った触手を俺の喉元に突きつけしないで下さい」

俺、ホールドアップ。触手はゆっくりと霧散していった。

……次は無さそうなのでもうしない。(ガクガクブルブル)

『では、お前には無限の平行世界に渡ってもらう。基本的に自由に動いて貰って構わない。ただし、最低限我を楽しませる為、条件を幾つかつける。条件を達成したら折り返しを見て他の世界へ移動して貰う』

等と言い出した。正直勘弁して欲しい。……一体何処のテンプレだ。ただの、ちょっと不幸でちょっと人とは違う『気合』を持っているだけの人間に何が出来るというのか。ならば俺もテンプレ通り、

「ならばせめて戦えるだけの『力』か、そこに至れるだけの『才能』または『努力の才能』を下さい」

と、言ってみた。神様はギョロリと黒い眼球を動かして、一つ肯いた。

『そうだな。ある程度の『力』が無くては面白く無さそうだ。故に幾つかの『力』をくれてやる。基本的に肉体、精神共に不老不死だ。ある程度の肉体再生能力と、PTSDを初めとする精神疾患が起こらないようにもしてやる。簡単に死なれては条件の達成も出来んし、簡単に精神崩壊されても詰まん。そしてお前の持っている『空間に足場を作る程度の能力』の他に『一部の例外を除き、汝が知って

いるあらゆる武術・流派の最秘奥義を伝授される事が出来る程度の身体能力』と『自分・他者問わずの年齢の変換能力』と、ある程度の『魔力』と『氣』もデフォルトでくれてやる』

………かなり質の悪い『力』が提示された。+の条件より、-の条件のが重いってのは如何なのか。というか、精神、肉体共に死ねないってどんな拷問ですか？なんと言う苦行。

『なんだ、気にいらなそうだな。………ならばアフターケアとして、他者への肉体、精神の不老不死の付加能力も加えてやろう。ん？………なんだ。此れも駄目か？そうだな、ならば更に………』

「いえ、不老不死関係についてはもうそれで結構ですー！」

………此处で止めないと半端無い状態になってしまう。
それ以上付加されたら世捨て人になる自信があります。（きりっ

『………そうか。それは残念だな。ならば、そうだな。汝の主観で最近汝が嵌っていた何本かのゲームやアニメを我流にアレンジした能力をくれてやる。どうだ。憧れていた英雄になれるぞ。良かっただろ？』なんだ、どうしてそんな物が分かるのかという顔をしているぞ。簡単な話だ。汝の頭の中を見てやったに決まっている』

………プライバシーは無いんですね、わかります。とはいえ、別に英雄願望は無いんだがな。有ったら此れから色々巻き込まれても楽だな、と思う位で。

『ああ、そうだ。幾つか物体的な餞別も渡してやろう。汝と共に送っておく。『道具の目録』と『力』の使い方は直接汝の頭に入れておく。向こうで確認しろ』

そういつて、神様は俺に光を放った。すると俺の頭の中に『力の使い方と『道具の目録』が浮かんでくる。はつきり言って色々ツッコミを入れたいが、ツッコミはなしの方向だな、怖いし。大事な事だから何度でも言うが怖いのでツッコまない。

『一番最初の世界は世界樹がある世界だよ。尤も、送る時代はそれなりに過去だけね。じゃあ、せいぜい僕を愉しませてくれ。フフツ、君がどんな人生を見せてくれるのか楽しみだよ』

最後に、美しさの中に禍々しさが内包されている様な女性の姿になった神様がそう言うのと同時に真下に穴があいた。が、それを予測していた俺は更に後ろにバックステップする。が、後ろに大地はなかった。どうやら真下の大地を消すと同時に後ろも消されたらしい。

『フフツ。簡単に逃げられる訳無いだろう？君がそう避ける事は初めから解っていたんだ、諦めなよ』

腹を立てた俺は、先程自分で思った事を無視してせめて一言文句を言おうと、神様を睨みつけながらその宙を踏み締め、神様の近くの大地に着地しようと跳んだ。昔から何も無い空間を気合で飛び涉れた俺にはほぼ、当たり前前の行為だ。が、抵抗も虚しく。虚空に不意に発生した『力場』によって叩き落とされ、下へと落ちていったのであった。

……………と言うか、今の姿はナ○ル○ テ プじゃなーか！！神々の王とか、騙されたああああつつつ！！

第一話 出会いと旅立ち

気がつけば俺は崖の近い、山の只中にいた。空は明るく、今の時間が朝方から昼間であるう事を示している。周囲に人影は無く、近くの崖には10歳位の金髪の少女が落ちかけている。……って、落ちかけてる！？俺はあわてて少女の側まで行き、手を伸ばす。が一瞬間に合わず、空を切る。俺は宙にその身を投げ出し、何も無い空を踏み締め、下に向かって跳躍する。そして少女を宙で抱き締め、神様から貰った『あらゆる武術を伝授される事が出来る程度の身体能力』で崖下の激流のあるう間にある岩を踏み締めて跳躍し、再び崖の上に着地した。少女を見ると彼女は、気絶していた。どうやら限界だったようだ。

取り敢えず、降りた場所に置いてあった『通常生活用品・サバイバル生活用品』道具専用ポシェットを開いて、その中から『どんなに汚そうとしても汚れず、決して燃えない肌触りの良い』毛布を取り出し、敷いてからその娘を寝かせ、『どんなに疲れていても目が覚める頃には全快している』安眠枕を取り出して、その娘の頭を乗せた。そして、もう一枚毛布を取り出して上に被せて休ませた。多少ごつごつしているかもしれないが、何も敷かないよりは良いだろう。その後崖へと赴き、カードケースを取り出してカードの確認をする。因みに、決して訳が解らない行動を取り始めた訳ではない。神様に貰った能力の確認をしようと言う訳である。……魚獲りでもしつ。

此处で『能力』理解の為、実践しながら頭の中で纏めてみる。この『能力』は単純に言えば、カードに記されている事を実現するというものだ。例えば、カードデッキの一番上にあるカードを取り出

す。すると其処にはWゼロカスタムが表記されている。それを四肢と腹の部分のベルトに通してあるカードスロットのどれかに差し込めば、一瞬で体がトリコロールの装甲に身を包まれ、背中には白いウイングユニットがつけられる。……要するにそのカードの姿になる事が出来る。カードは一つのスロットに5枚まで入れる事が出来る。合計25枚までのカードを入れる事が出来る。下記の内アーマーカードと幻想種・魔獣召喚カードと機体・機神召喚カードは各スロットに1枚しか入れられない。後の4枚は残り4種のカードしか入れられない、と。

因みにカードの種類だが、大きく分けると以下のようなになる。

- ・アーマーカード …… A Jを着用する為のカード。
- ・幻想種・魔獣召喚カード …… モンスターや幻想種を呼び出すカード。
- ・機体・機神召喚カード …… 機動兵器や機戒神等を呼び出すカード。
- ・武装・宝具召喚カード …… そのまま武装や、宝具を呼び出すカード。
- ・マジックカード …… 敵の弱体化、攻撃の反射、攻撃の無効化、武装魔力化等のカード。
- ・必殺技カード …… 切り札の起動時に必要。単体では使えないカード。
- ・システムカード …… 機体のシステムだけを利用したい時に使うカード。

俺は腹部のカードスロットにゼロカスタムのカードを通す。すると体全体が光に包まれ、次の瞬間にはゼロカスタムをなぞったかのような全身鎧に身を包んでいた。当然顔もゼロカスタムの頭部そのままな兜に包まれていた。頭の部分は取り外す事も出来るようだが

取り外さなければ、外から見るとまんまウイングゼロカスタムである。命名するなら、

アーマージャケット（以後AJ）

で良いと思う。不思議な事にまるで重さが無い。質量はちゃんと有るのに体感重量がゼロなのである。貰った記憶によると、原作の合金製ではなく、神様が暇潰しに創った金属で出来ているのだとか。何でも、デモンベインの装甲の『ヒヒイロガネ』と、SRWOGシリーズの『ズフィルードクリスタル』と、『ゾルオリハルコニウム』と、ガンダムWの『ガンダニウム合金』の良い特性を併せ持った金属らしい。その内容は以下の通りである。

『ヒヒイロガネ』

- ・魔術的防御能力と魔力の乗せ易さ

『ズフィルードクリスタル』

- ・自己修復製

『ゾルオリハルコニウム』

- ・軟体から硬体へ流動性

『ガンダニウム合金』

- ・軽量性

強度Ⅱそれぞれの金属の和の4乗

……何処の『ぼくがかんがえたさいきょうのきんぞく』だろうか。特に強度。俺にはナイ〇さんが何を考えているのか解らない。彼女と敵対する可能性を考えないのだろうか。いや、まあ敵対したって勝てないだろうけれど。原作より遙かに強いのだろうし。

以上の通りである。なお、使用時に『魔力』『気』は必要としな

い。……チートである。

俺はマジックカード『ミュート』を使用して、自身から発せられる音を消してスラスターをふかし、姿勢制御を上手く取りながら上流の川へと飛んでいく。どうやらかなり山の奥だったようで人影は一切無い。因みに低空飛行で飛行訓練をしながら飛んでいる為、たまに木にぶつかりそうになる。が、ビームサーベルを展開して切り裂いて難を避ける。使っているAJの武装は思考だけで一瞬で現れるようで、タイムラグは殆ど無い。そのまま上流へ行き、ポシエツトからプラスチック製の20?容器を取り出して、水を汲み、魚を20匹ほど取って『フリーズ』のカードを使用して一匹一匹凍らせる。そしてそれを保冷库―（内容量10トン、材質はAJと同じ物、動力は超低出力太陽炉）を取り出して入れる。保冷库の中に入れた物の重さまで感じないので、本当に使える金属だ。

その後、それらを再びポシエツトに入れ、ビームサーベル片手に飛翔し、女の娘の所まで飛んでいった。帰りに2、3本の枯れ木がある程度の大きさに寸断し、ポシエツトからビニール紐を取り出してから、小分けしてきつめに縛って持っていたので、一つだけ縛り目を解いてから適当に広げ、またまたポシエツトからチャッカマシと適当な紙を取り出して着火させる。保冷库から取り出した魚を瞬間解凍してから塩を軽く塗り、ポシエツトから取り出した串を差し込み、火の周りに突き刺す。そして鍋を取り出して火に掛け、20?の水を入れて煮沸消毒する事にした。そして千本のカードをスロットに入れ、千本を取り出して周囲を飛んでいた小鳥を狙い。

「目標を……狙い撃つ！！（小声）」

見事に打ち落としたのであった。その後、小鳥の羽を塗り。魚が
いい具合に焼けてきたので3匹食べて、再び小鳥の作業に入り、血

抜きをしてから肉団子にして別の鍋を別に火に掛け、中に落とし込む。更に醤油とみりんと胡椒を少々入れて、ふと周囲を見ると野ウサギが居た…。当然逃がす事無く、千本をぶち込む。調理を続けながら野ウサギの皮をはいで、血抜きをして捌いて、『フリーズ』を使用して瞬間冷凍して保冷库に保存する。昔からたまに発生する不幸イベントの末のサバイバル生活のお陰で、動物を食料として殺す事への嫌悪感は既に無い。そうしないと生き残れなかったからだ。

獲物を見つける 処理をして保存 獲物を見つける 処理をして保存

肉団子汁をすすりながらそんな事を暫く繰り返していると、その内夕方になってきたのでポシェットからテントを取り出して組み立てた。そして夕食の準備を開始、魚を焼いていると少女が起き出して来た。少女は最初毛布を不思議そうに見たり、テントを興味深そうに見ていたがこちらに気がつき、ゆっくりと近づいてきた。どうやら警戒しているようだ。俺は手招きをして近くに来るように言い近づいて来た女の娘に焼いた魚を差し出した。

「警戒したい気持ちは解るが、先ずは食え。食わないと力が出てこないぞ」

少女は驚いたように目をまん丸にして、その後おずおずと手を差し出してきたのでその手に魚の串を乗せて上げた。少女は充分に冷ましてからカプリと魚を齧る。……一瞬口を開いた時に犬歯が異様に発達しているように見えたが、恐らく彼女はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。特徴も漫画と一致するし、恐らく間違いないだろう。多分、だがまだ彼女は吸血鬼になってそんなに経っては居ないのだろう。

せいぜい数十年。漫画でも彼女は最初の数十年が一番辛かったと言

っていた。と、すると今がまさに一番辛い時期なのだろう。そんな事を考えていると、エヴァンジェリン？は食べ終わったのか串を火に入れて俺に話しかけてきた。

「何故私を助けたの？」

……………何故か、ときたか。俺は苦笑しながら答えた。

「崖から落ちそうになっている少女を助ける事は悪い事か？」

少女は頭を振って答えた。何処となく不安そうな顔をしている。

「そうじゃないけれど。でも、私は吸血鬼だから。普通は助けないよ？」

「だったら簡単な話さ。俺は普通じゃないんだろう。そもそも吸血鬼だとは知らなかったが、そう知っていたとしても助けただろうしな」

俺はにやりと笑いながら、間髪入れずにそう返してやった。

「世の中にはいい人間と悪い人間が居る。だから、同じ様にいい吸血鬼と悪い吸血鬼だって居る筈だろう？俺は種族で判断とかはしないくちだ。あゝゝ、…………俺の名前は羽村 明。こつちじゃアキラ・ハムラ。呼ぶならアキで良い。因みに君の名はなんと言う？」

「…………私はエヴァンジェリン。エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウェル。30年前に真祖の吸血鬼…………にされた者」

漫画どおりか。ならば、

「ならばエヴァンジェリン自身に人の血を吸うつもりは？」

と、聞くと。

「吸わなくても別に生きていけるし、私を害する人以外からするつもりは無いわ」

との答えが返ってきた。

「なら、人の嫌がる事をするつもりが無いと言う事だし、少なくとも俺が君を嫌う理由はないな。もし君さえ良ければだけど、しばらく一緒に行動しないか？こんなかわいい子と一緒に旅が出来るなら俺も嬉しいしね」

俺はエヴァンジェリンの目を見つめながら続ける。

「急には決められないだろうし、ゆっくりして考えると良い。あ、安心していいよ。俺自身、不老不死の存在だから。君が望めばだけれど一緒に居る事は何の痛痒も無い。君が襲撃の事を気にしているなら、それは、多かれ少なかれ有る様になるだろうし。どうしても気になると言うのなら俺がかわいい子と旅をする為の投資、と言う事にしてくれ」

俺が冗談っぽく言うと、エヴァンジェリンはクスクスと笑い、

「……考えさせてもらえるかな？」

と言うので肯いてやる。エヴァンジェリンは焚火の前で暫く黙考していた。

……静かな時が訪れる。たまに、パチパチツという焚火の音しか流れない。空を見上げれば綺麗な星空。当然だろう。まだこの時代には蒸気機関も生まれては居ないのだから。暫く夜空を見上げているとエヴァンジェリンが話し掛けてきた。

「……………良いよ。一緒に行こう?。」

どうやら認めてくれたようだ。——と、周囲の空気が緊迫し始めた。山の麓の方が不意に騒がしくなってきた。見れば松明がちらほらしている。

「さて、エヴァンジェリン。どうやらお客さんのようだ。どうする?火の粉を払うか、それとも此処は一旦退くか?。」

俺は立ち上がりながらエヴァンジェリンに聞く。

「えっと、じゃあ一旦退こう?それと私の事はエヴァで良いよ。」

エヴァンジェリンも素早く立ち上がりながら言う。

「ふむ。了解した。じゃあ少し待っている。エヴァ。」

「うん、分かった。急いでね、アキ。余り時間無いよ。」

エヴァが麓を気にしながら声を上げる。

「ああ、分かっている。」

俺はそう言いながらテントを直ぐにしまつ。そして、ポシエット

から保冷库と同じ性能の冷蔵庫を取り出して挿してあった魚を中に入れ、小分けした水も入れてから再びしまう。その後毛布や枕も入れて、準備を完了させた。続いて、アーマーカーデッキからゼロカスタム、マジックカードデッキからソニックキャンセル、システムカードデッキからグラビコンシステムを引き、右腕のスロットに差し込む。今回は頭部無しバージョンだ。エヴァを抱き寄せる。

「あつ／／／／」

エヴァが赤くなつて声を上げたが気にするな。俺もちよつとドキしているんだ。何故か知らないが感覚がある。おのれ、邪神^奴の仕業か。（柔らかな感触が……／／／／。ええい、考えるな、感じる。いやいや感じるな、違う事を考える）

「しっかりと捕まつて居ろよ。じゃないと危ないぞ」

脳内で混乱した事を考えながら、スラスターを全開にする。当然『ミュート』を右腕スロットに差し込んであるのでスラスター音はしない。あつという間に山から離れていく。因みにソニックキャンセルは空気抵抗を消すマジックカードで、グラビコンシステムは重力操作のシステムだ。当然空気抵抗も慣性も発生しない。そうして俺達は綺麗な星空の元、二人旅を開始したのだった。

第一話 出会いと旅立ち（後書き）

エヴァ「……………なんだ、此れは」

作者「え、…………取り敢えず、第一話？」

エヴァ「それは分かっている。私が聞いているのは、何で私があんななんだということだあああつつつ！！！」

作者「いや、もし一番辛い時に分かって貰える同志が現れたらああなっている様な気がするんだよね。という訳で早速キャラ崩壊の予感がちらほらと」

エヴァ「私のキャラを勝手に弄ると如何なるか見せてくれる！！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック ト・シュンボライオン・ディアーコネートー・モイ・ヘ・クリュスタリネー・バシレイア・エピゲネーテートー・タイオーニオン・エレボス・ハイオーニエ・クリュスタレ」

作者「ちよっ…………（氷漬け）」

エヴァ「パーサイス・ゾーアイス・トン・イソン・タナトン・ホス・アタラクシア コズミケー・カタストロフエー！！！」

パキインツッ！！

エヴァ「当然の報いだ。死して贖え」

自己修復中

作者「……（ボソツ）……酷いや、エヴァちゃん……」

エヴァ「ええい、唯の人間が自己修復なぞするんじゃないっつー！！」

作者「さて、次回は……何時だろ。出来る限り早く頑張ります」

エヴァ「……ええい、キリキリ書かんか！キリキリ」

第二話 襲撃と成就？とお勉強（前書き）

・今話、ただでさえ壊れていたエヴァが全力全壊します。くれぐれもご注意下さい。

・エヴァの年齢は2003時点で615歳と言つ仮定で進めます。

第二話 襲撃と成就？とお勉強

さて、エヴァと俺が旅に出てから20年もの月日が経った。エヴァはどうかやら日光を克服しつつあるが、やはり未だ少し辛いようで基本的に夜動いて朝眠る事になっている。まあ、それまでの生活でエヴァと俺は結構仲良くなり、家族みたいな間柄になってしまっている。俺自身はエヴァの事を恋人にしたいとそう考え、そろそろ、その、何だ、こ、告白しても良いか等と考えている訳であるが。……まあ、エヴァがそういう対象で見えない可能性がある訳だが。もちろん、フラれてもアイツが求めるなら引き続き一緒に旅をするつもりではある。逆を言えば別れなくちゃならない可能性もあるが、それは考えない！！

現在地は魔法世界の学術都市アリアドネー……近郊の荒野。犯罪者でも開いてくれると言う門戸を叩いて修行をしようと近くまでやってきた。が、そこで運悪く奴等に狙われて、そして見つかった所である。

「ついに見つけたぞ！！『闇の福音』に『不死の鋼鉄』！！この正義の魔法使いアレックスが貴様ら悪の吸血鬼に引導を渡してやる！！」

「私こそは正義の魔法使いジーエクスなり。悪の吸血鬼は今日この場にて潰えるのだ！！」

「やあやあ我こそは『絶対正義』の魔法使いレオパルドなり！！悪の吸血（以下略）」

……正義の魔法使いってのは多分、昔がこんなだから今にまでこういった悪習が根付いているんだろうな。そりゃ原作でもエヴァが自称正義の魔法使いを如何でも良いと思う筈だよ。台所に居る人

類の大先輩様方の様に（進化的意味合いで）一匹居たら百匹覚悟した方が良いんじゃないか？

思わず目を合わせてから溜息を付く俺とエヴァ。こんな感じで、襲撃はもう4桁後半に届くのではないかという数になっているのだ。最初のほうは大変だった。何せ、エヴァは魔法がまだそんなに使えなかった。だから俺もエヴァの近くを離れなかったから、何時もぼろぼろになる。俺自身、戦闘慣れをしていなかったから対応が遅れたりして、エヴァを庇って『不死を持っていなかったら死んでいた』様な傷を良く喰らったりしたしな。その度にエヴァを泣かせて俺が困ったりした訳だが。後、中々人殺しというのは難しい。元一般人の俺は最初、『不殺≪殺さず≫』では無く『不殺≪殺せず≫』で、エヴァを危機に陥らせた事が有る。そのエピソードは書くとなると単行本5冊位になるので勘弁して欲しい。それが有って、今ではそんな甘い事は言わず、心を鬼にして殺している訳だが。……又エヴァを失いそうになるのは御免だからな。まあ、たまに心が折れそうになって、エヴァに説教されたりする事もあるわけだが。

…… な、泣いたりしたことなんか無いんだから！！

…… 済まない、自分でやってて気持ち悪くなった。

それはともかく
閑話休題。

目の前には自称正義の魔法使いが20人ほど。取り敢えず腹部のカードスロットにエクシアのカードを差し込む。すると俺の姿はエクシアになった。そしてGNソードを展開する。エヴァはエヴァで爪を伸ばし、詠唱を始めていた。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック」

今の俺達の基本戦術としては先ず。

「セブテンズギル・トクキアール・ス・エウンテース・イニクムコンキダント氷の精霊17頭集い来たりて敵を切り裂け！！」サギタ・マギカ・セリ魔法の射手・連
エス・グラキアリス弾・氷の17矢』！！」

エヴァの魔法が発動する。17発の氷の矢が相手を襲い、相手を凍らせるなり迎撃なりをさせて、態勢を崩させ、

「エクシア、目標を駆逐する！！！」

俺がその直ぐ後に突っ込み、体制を崩した奴らを薙ぎ払う。避け切れずに足が凍り付いた奴を上下真つ二つにして、すぐ次へ。体勢が崩れ、死に体になっている奴の首を落とす。真つ赤な鮮血が飛び散り、エクシアのボディを汚すが気に止めずに、次の奴の元へいく。そして、敵が咄嗟に構えた杖ごと縦に真つ二つにしてやる。

「くっ、奴め、一瞬で三人だと！？ええいつ、怯むな、此方も反撃しろ！！」

大体その頃には反応の早い奴所か、ある程度の反応を持った奴は、此方に対応しようと動いている。が、その頃にはもう一回、数は少ないが無詠唱の氷の矢が飛んで来る。そのタイミングで再び避けられなかった奴を切り裂く。その繰り返しだ。勿論、エヴァには俺が魔法カード『魔法反射』と、システムカード『念動フィールド』を使っている為、

「なにっ、魔法が跳ね返って！？…ぐはあああつつつ！！！」

この様に相手の魔法も物理攻撃も、エヴァに向かったものは全て

相手に帰る様になっている。つまり、俺を倒さない限りエヴァはダメージを受ける事はないわけだ。

「おのれ、『不死の鋼鉄』を集中して狙え!!」

必然的に俺に攻撃が集中するが、

「魔法が、通らないだとおおっつ!!」

「速過ぎてあたらねえし!!」

AJの装甲は全く敵の攻撃を通さない。その上、エクシアは接近戦のエキスパート装備。速くて捉えきれない。……必然的に、

「何この無理ゲー!!」

状態になる訳だ。結果、一方的に蹂躪する事になる。で、たった一人残った敵がなにやら「死にたくない」だの「助けてくれ」だの言っているので、何時も通りこう言っただけ。

「お前らはそうやって命乞いをしてきた悪い者を無慈悲に殺してきただろう?」なら、自らがこうなった時に無慈悲に殺されるのは当たり前だろう。それと、レオパルドとやら……。冥土の土産に一つだけ教えてやる」

GNライフルの照準を合わせて。

「……この世には『絶対の正義』なんて存在しねえんだよ」

引鉄を引いた。……残ったのは、頭の無い骸のみだった。

「うん、何時も通り鮮やかに片が付いたね」

エヴァがこっちに駆け寄って来て言った。

「ああ、何時もこうだと良いんだけどな」

俺も肩を竦めながらエヴァに返事を返した。

「けどそう上手くは行かないよね。相手だって死にたい訳じゃないだろうし」

かなりめんどくさそうに言う。……まあ、同感な訳だが。

「くくつ。……それもそうだな。次からは注意するか」

「さて、それじゃ先に進むとするか」

俺とエヴァは頷き合い、アリアドネーの街中に入っていったのだ。
った。

話は変わるが、戦いの時は基本的に立ち止まってはならない。立ち止まれば其処を狙い撃ちされる。だからと言って直線的に動いたり、法則に縛られた動きをしていても駄目だ。……勿論例外はある。ある程度の極みに達した武術であれば、それだけで事が済むからだ。後、防御に絶対的な自信とその確証が有る奴。

閑話休題。

その後は街中で正義被れに会うこともなくなり、かなり楽が出来た。その場で暫く買い物をしたり、少し観光をしたり、である。そ

の夜、宿で俺はエヴァの部屋に行き、とある話を持ちかけた。

「アキ、話ってなあに？」

「実はな。エヴァ、お前に一つ提案があるんだ。お前は以前、成長出来るならしたいと言っていたな？」

エヴァはコクリと頷いた。

「うん、言ったよ。成長出来ればいろいろと自由に行動もとれるし。他にもやりたいことも出来るし、ね」

エヴァが意味深な微笑みを浮かべる。……何故か身震いがしたのは気のせいだと思いたい。

「実はな、それ、俺の『能力』の一つでどうにかなるかもしれないんだ。自、他、問わず肉体年齢を自由に変更出来るという能力でな」

エヴァの顔がパツと輝く。が、同時に俺は何故か蛇に睨まれた蛙の様な気分になった。

「ねえ、それを私に直ぐに使ってくれないかなあ？」

何故か猫撫で声のエヴァ。

「あ、ああ、構わない。じゃあ何歳くらいにする？」

俺は相当引き気味だ。ヤバいと本能が警笛をならしているが同時に行けとGOサインをだしている。

「アキと同じ位が良いかな。クスクス」

！?……間違いない、やる気だ。俺はそんなつもりで言ったんじゃないんだけれどな。奴の眼は既にその気だ。が、一度言った事を曲げる気はないので、彼女の肉体年齢を18歳位まで上げてやる。すると、身長が170?位まで伸び、かなりお色気感のある姿に成長したのであった。漫画でいう所のアダルトエヴァである。……少し若いかもしれないが。なお、服は今回一緒に大きくしたので心配は要らない。

「さてと、成長にも成功した事だし、俺は部屋に帰って休む事にするよ」

そう言つて部屋の外へ逃げようとしたが、エヴァに何故かベッドへ投げられた。そしてにじり寄ってくるエヴァ。

「ねえ、アキ。何で逃げるの?私何も酷い事はしないよ。……ただ、一つ欲しいモノを手に入れるだけだよ。クスクス」

「ちよつ、落ち着けエヴァ。俺達はまだ逢つてからそんなに経っていないじゃないか。そういう事はだな、せめて恋人、または夫婦になつてからすべきであつて……まだ早いと思うんだ。な?」

少しずつベッドから離れようと俺は動くが。少しずつにじり寄りながらハラリと服を脱ぎはじめエヴァ。その下には下着を付けていないため、こぼれ落ちる二つのメロンが。それを隠す事も無くついにベッドの上に膝を付いてハイハイの体勢で近付いてくる。すると二つのメロンもユサユサと前後に揺れる。余りの迫力に凝視してしまつた内に逃げ場は塞がれていた。し、仕方ないじゃないか!好きな人の裸を見せ付けられて逃げられる訳あるか!?

「何を言っているの？もう20年も経っているわ。それに、アキは初めて逢った時に言ってくれたわ。私が嫌だというまで一緒にいてくれるって。それって遠まわしな告白よね？私を寂こんなしがり屋にしたのはアキ。いまさら返品は聞かないし、受け入れられないわ。……それとも、私の事、嫌い？」

「最後のその上目遣い、ずるいと思います。そんな事言われたら、俺、断れないじゃん」

ちよっ、そ、そんな嬉しそうな顔して飛び掛ってこないで……
……いや、ちよっ、まっ……アッー！

アキは、おいしくいただかれた。

………そして夜が明けた！

……まあ、めでたく恋人同士になれた訳だが……。何か釈然としない。と、言うか俺は何で最初に押し倒された時に告白をしなかったんだろうか。それをすれば主導権握られっぱなしはなかったと思うんだが。何と言うか、悔しい気がする。………っていうか、学術都市に来て最初の夜に俺達は何をしちゃってるのか……。こんなんで俺達はまともに魔法の勉強出来るのだろうか。

それはともかく
閑話休題。

結論から言うと何も問題有りませんでした。何でも当時の学長曰く、

「『闇の福音』？『不死の鋼鉄』？そんな方々に術式を覚えていた
だければ、我々の研究成果を末永く後世に遺せるじゃないですか。
大歓迎です。見たところ、どうやら御自分達が平和に暮らせればそ
れで良い方々のようですし。いつその事この学園内の術式全部覚え
て頂きましょう。……悪用？『力』はただ『力』です。それを良い
様に使うのも悪しき様に使うも全ては使い次第。そんな事も判ら
ん愚か者に使つて欲しくないですからなあ。まあ、良い振るい落と
しになるのではないかと」

……………それで良いのか学術都市。いや、俺達は楽にいろいろと
覚えられるから嬉しいけれど。

そんなこんなで結局、10年間ほど世話になったのであった。い
や、此処最近で最も充実して、最も平和な時だったのではないだろ
うか？

俺達も、術式を教える代わりにアリアドネーで暴れたりする連中
を取り締まったりしたし。あ、勿論姿は変えて、俺は『力』を使わ
ずにエヴァと二人、魔法だけで。エヴァも、血を余りにも吸ってい
る事を見た事無いから、実は俺と一緒に只の不老不死なだけじゃな
いのか。ウツカリ前の晩に頑張つてしまつて俺がげっそりとしてい
る時等には、実は真祖の吸血鬼ではなく、真祖の吸精鬼なのでは。
とか色んな噂が飛び交ったりしたものである。

そして丁度10年後の今日。俺達は再び旅立つ。俺はスロットにアリオスの機体召喚カードを差し込む。現れたアリオスに二人で飛び乗って戦闘機形態へ移行。緑色の粒子を放ちつつ、俺達は空へと消えていったのであった。

第二話 襲撃と成就？とお勉強（後書き）

作者：（さて、第二話をお届けいたします）

エヴァ「作者ああああつつつ！！何処行つたあああつつつ！！」

作者：只今、ミラージュコロイドで隠れております。じゃないと殺されてしまいますので。

エヴァ「出て来ないつもりか。良いだろう。それならば、茶々丸、やれ」

茶々丸「はい、マスター。では離れてください……アデアット！……
チャオバオジーサテライトサポート
……二二三〇式超包子衛星支援システム『アル・イスカンタリア空とび猫』起動。照準、この辺一帯。……発射」

カッ……ジュッ。

作者：なん……だ……と。

作者は消滅したかもしれませんが。なお、兵器の射出試験を確認したければ、ネギま！31巻281時間目を確認してください……。

第三話 拠点構築と邪神降臨と観光旅行（前書き）

相変わらず、エヴァが既に別人です。読まれる方はどうぞ許容してからお読み下さい。

・エヴァの年齢は2003年時点で615歳という仮定です。

第三話 拠点構築と邪神降臨と観光旅行

アリアドネーから旅立つてから数年。俺達は魔法世界の色々な所を観光していた。因みに姿形は俺が10歳、エヴァが18歳位にセツトしていた為、俺が『力』さえ振るわなければ滅多にばれる事は無かったと言っておく。地方の武闘祭に自主ハンデ参加してみたり（俺は炎魔法縛りでエヴァは氷魔法縛り）、夜の迷宮を踏破して、偶々オスティアで見つけた『鬼神の童謡』コンプティナ・ダエモニアを説明書付きで宝箱に入れて置いてきたりした。その後は旧世界に戻り、正義かぶれ等を適当に相手しつつ、南海のとある孤島に拠点を構えた。イナクセシブル島（イナクセシブル島とは南大西洋に浮かぶイギリス領土セントヘレナに属するトリスタン・ダ・クーニャ諸島にある小島）のその周辺にある少し小さく、何も無い島。アリオスを使つて拠点となる島探しの途中で見つけた。周囲はこれでもかと言わんばかりに海一面である。其処にでかい城を建てる事にした。俺の身体能力で岩を寸断したブロックを一つ一つ運んで愛の巣作りを頑張った事15年。どっかの鳥の形をしていて空を飛ぶ、大魔王様のパレスのような途轍もなくデカイ『城』が出来上がった。序でに『魔力』や『気』の応用によつて植生は少し増やさせて貰ったが、何も問題は無い筈だ、……多分。

「キティ、用意できたぞ。……此れで奴等も中々来られまい」

一体何時の間に情報を得たのか、最近では変装していても判別してくるのだ。ちなみに呼び方が変わっているのはエヴァの要請だ。ブライベートの時の呼び方はこうして欲しいらしいので受諾した。

「そうね。奴等、しつこい事この上無いから。……此れでこつちでものんびり出来るわね、アキ」

エヴァももう嫌と言わんばかりの嫌そうな顔を浮かべつつ、あいつ等ストーカーよストーカー。と呟いている。

「……まあ、そうだな。取り敢えずはゆっくりしようか？」

苦笑いしながら、その意見には同意する。と、言葉を返しておくのを忘れない。あいつ等と来たら、エヴァの事を好色そうな目で見てきやがるから油断も隙もありやしない。エヴァの俺の嫁だ！！異論は認めん！！

「そうだね。取り敢えずは、ゆっくり、だね」

そういつて微笑を浮かべるエヴァ。その手には俺の腕があつた。

……あれ？

「えっと、なんで俺の腕を取られるんでせうか？」

「クスクスッ、どうしてかなあ？」

そのまま引きずられていく俺。取り敢えず色々なものを諦めておく。多分、何日か寝れそうに無いし、せめて精の付く物を食べさせて貰ってからにしようと思に決めたのだった。

それはともかく
閑話休題。

そんな事になってから数年が経ち、現在俺とエヴァは組み手をしようとしている所である。俺はデスサイズヘルカスタムの武装カードを取り出し、スロットに差し込む。今回は純粹に模擬戦なのでAJやバリア等は俺は使わない。使ってしまったら俺に攻撃が通らず、

模擬戦にならないからだ。エヴァはエヴァでつい最近編み出した『^{マギア・エレベア}闇の魔法』を使い術式兵装している。使っている魔法は速さに対抗する為か、『雷の暴風』だ。そして一年ほど前に作り出した自動人形壱ことチャチャゼロも大型ナイフを構える。俺は徐に石を取り出し、上に放り投げた。そして落ちるか否かのタイミングで互いに動き出した。

まず、チャチャゼロが動く。一足飛びに俺に向かって突っ込んでくる。そしてナイフを左から右へ薙ぎ払うように振るう。それを紙一重に避け、サイズを右から左へ振るう。チャチャゼロは後ろ側へ跳んで避ける。振り切った所で、そこから更に左にエヴァが一瞬で現れ、爪を振るう。が、俺もそれは警戒していたので瞬動で真後ろに下がる。それを狙っていたのかエヴァは手をこちらにむけて掌握していた『雷の暴風』を解放する。体勢が崩れている為、普通なら当たるところだ。けれどこちらは普通じゃない。こちらも無詠唱の『闇の吹雪』で対応する。普通に撃ち合えばエヴァの詠唱版『雷の暴風』が勝つが、俺が使った無詠唱版『闇の吹雪』は横から詠唱版『雷の暴風』に突っ込み、軌道を強引に変える。その間隙に滑り込み、体勢を整え、サイズを下から上に振るう。しかし相手も俺を良く知っているからか、簡単に『エクスキューションソード』で受け止める。そのまま鏝ぜり合いになるが、そんな隙をチャチャゼロが逃す筈も無く、

「ウケケツ、隙有リダゼ」

と、大型ナイフを振るう。血飛沫が飛び、俺の首は宙を舞ったのだ。今回の模擬戦も俺の負けの様だ。……どれだけ『力』に、防御面を任せているかが分かる光景だ。

「……………。チャチャゼロ、いつも言っていると思うがな。模擬戦の度に首飛ばすんじゃないやねえ。痛てえって言っているんじゃないか！」

それに対しチャチャゼロは、

「ケケケケ、コツチモ何時モ言ッテイルジャネエカ。ソレジャ鈍ッチマウンダヨ。タマニハ人ヲ斬ラセロヤ」

等と言って聞く耳を持たない。

「大体お前は何時も何時も——」

そのまま何時もの様に言い合いが始まったりする。

そんな感じで毎日が過ぎていたりする訳だが。そんなこんなから、また一年位したある時の事。

最近良く思う事がある。……あの時、ナ○アさんが言っていた条件って一体何なのだろう、と。邪神のパシリだとか聞いた事は有るのだが、やっぱり邪神を復活させるのを手伝えとか、そういったものなんだろうか？

『クスクスッ、そんな物は頼んだりしないさ』

一人で城のテラスに立っていたら、急にそんな声が響いた。……この一度聞いたら魂に警告が直接刻まれる様な美しいながらもおぞましい声は……………」

「ナイ○ルラ○ホテップ!!」

その名前が口から漏れ出した瞬間、周囲の時は凍結した。彼女はそしてその姿を現す。

くっ、このプレッシャー、流石は邪神級、と言った処か。物理的な圧迫感すら感じられる。あれからそこそこ強くなれたからか、あの時にはわからなかった凄まじいほどの邪気を感じる事が出来た。正直あの時の俺が羨ましいとすら自分で思うほどだ。と同時にあの時の俺は正しく、大口を開けた鮫の目の前で悠々と泳いでいる魚だったという訳だ。

『久しぶりじゃないか、僕の可愛い可愛い人形、羽村明』

……………こいつ……………。口を開いた瞬間プレッシャーが激増する。

「くっ。…………時を操れない云々はアンタのデマだったという訳か」

俺はプレッシャーに耐えつつ口を開き、質問する。

『へえ、流石だね。もう喋る事が出来るのかい! ああ、本当に君は良い拾いモノだよ。今回は一方的に話して帰るつもりだったからね。嬉しい限りだよ』

また邪気が増す。なにか、凄くご満悦の様だ。もう既に物理的な

痛みすらある。喋る事にすら気合を入れないといけない。

「……っ、いたく、ご満悦の様だな。……くつ。で、条件の件だったか。俺は何をすれば良いんだ？」

取り敢えず、用件だけ聞いて帰ってもらわないと。エヴァやチャチャゼロに危害を加えられたら最悪だ。

『クスクス。僕はとても機嫌が良いからね。二人に危害なんて加えないさ。で、条件の方なんだけど。君は普通に生きてくれて構わない。それだけで十分に面白いみたいだからね。言っただろう？僕はただの暇潰しがしたいだけなんだ。もしどうしてもというのなら、そうだね。余り長く平和に生きてほしくはない、とでも言おうか？』

「……………良いだろう。暫くしたらまた観光にでも赴いてやるさ」

そう俺が言うと奴はうんうん、素直さは大切だね、と綺麗な中に狂気を感じさせる微笑みを浮かべた。刺客を差し向けられたらたまらないので嘘なんか付けない。

『大丈夫、刺客何か向けないさ。僕は君みたいな素直な子は大好きだからね。そんな君にはプレゼントだ。使つと良いよ』

そういつて、奴は俺にカードデッキを二つ投げてきた。カードデッキの帯にはそれぞれ、『技能』、『人物』と記されている。

『それを使えば、技能カードは使用中、そのままその技能を使える。キャラクターカードはそのキャラの技能を使える。機体召喚カードに重ねて使用すればそのキャラの思考を持った人工知能の機体が出来上がる。どうだい、使えるカードだろう？』

確かに使えるカードだ。戦局によっては切り札にすら成得る。

「すまないな。有り難く使わせて貰う」

奴がくれたモノでも『力』は『力』だ。この『力』も大切な人と俺自身を守る為に使わせて貰おう。

『ああ、ついでにもう一つ。君が再び僕に願いを持った時、代償次第で色々な『能力』をあげよう。因みに君は不老不死では有るけれど、僕の君に対する拘束時間は有限、大体一万年で解放する事を約束しよう。君に対する僕からの贈物はこれ位。フッフ、それじゃあ、上で君の人生を楽しく見させて貰うよ。じゃあね』

そういうと奴は消え、時間が再び流れはじめた。それから直ぐに奴の残した気配の残滓を感じ取ったのか、エヴァとチャチャゼロがテラスへやって来た。

「アキ、今の気配は何なの！？説明して!!」

「今ノ気配ハ洒落ニナラネエゾ!!何ダ!説明シヤガレ!!」

これは、しない訳には行くまいな。……、怖がられるかな？嫌われるかな？……嫌なものだな。そんな筈ないと思ってんのに一瞬でもこんな想像しちまう。

「……………。分かった。全部説明しよう。俺がどんな存在なのかも全部込みでな」

それから、全てを洗いざらい吐いた。流石に、原作の事を言った

時には啞然とされたが。そして奴の事を話したら、俺は二人から殴られた。チャチャゼロは無言で。エヴァには涙眼で、

「この、大馬鹿あー！私がそんな事で貴方から離れる訳無いじゃない！！私にとつて貴方はそんな程度の『大切な人』じゃないんだから！！そんな事も分からないなんて貴女は私をどういう眼で見ているのよっつっ！！！」

と、言う言葉から始まり、一週間ぶつ続けて、色々な意味の説教が行われたのであった。

もう、このネタは充分だろ……、バタリ。

それはともかく
閑話休題。

そしてそれから更に20年が経って。孤島に馬鹿どもが攻め寄せようになった。その数、800人ちよい。暫くぶりの戦闘で景気良く『千の雷』を念の為3発ほど叩き込んで全滅させてから、ダイオラマ球にエヴァパレス（命名・俺）を島と周囲の海域ごと封印して観光旅行に出た。エヴァが観光しているその一方で、俺が一番最初に調べたのは今の俺達の賞金。調べた結果、エヴァは1200万ドル。俺に至っては3000万ドル。多分漫画に比べてエヴァの賞金額が多いのは、俺と組んでいるから。倒した馬鹿の数も明らかに多いと思うし。そして、何故かチャチャゼロまで賞金。それも200万ドル。急に現れておきながら俺と共に前衛を務めることが出来るLVの強さを持っているためだろう。

因みに俺は最近、エヴァに武装カードの武器を使わせたりもしている。エヴァのお気に入りにはファンゲだ。今の限度数は6本と少々少なめだが、射撃にも刺突にも対応するこの武装がお気に入りなの

だ。今も2、3人を串刺しにして、捻じり上げ、臓腑をぶちまけさせた所だし。……最近エヴァが、随分と過激だ。やはり、色々あるんだろうなあ。ストーカーとか。ゆっくり出来ないとか。……それで城に残っているか？と聞いたら氷付けにされたし。一緒に居られないのは嫌らしい。……嬉しい事言ってくれんじゃねえか。それで最近荒れている訳だが、さてどうしたものだろうか。そんな事を考えながら、今日も俺達の旅行は続くのであった。

第三話 拠点構築と邪神降臨と観光旅行（後書き）

自己修復完了・・・。

作者「ようやくと修復できた。……あ、第三話お届けいたします」

エヴァ「……………もう貴様には何も言わん。このエヴァは正しく別並行世界の私だ。……言うのにも疲れたわ（呆れ）」

エヴァ（並行）「そうよ、私は貴女とは違うのよ（えっへん）」

エヴァ「何で貴様まで此処にいる！！ここは私の場所だろうが！！」

エヴァ（並行）「良いじゃない別に何か減る訳じゃ有るまいし、ていうか減るほど無いし」

エヴァ「……………何が減るほど無いんだ？（#）」

エヴァ（並行）「えっと、身長と……………胸？」

エヴァ「貴様……………余程死にたいようだな……………」

エヴァ、『エクスキューションナーソード』を構える。

エヴァ（並行）「私はまだ死ねないから、迎撃させて貰うわよ」

エヴァ（並行）、ファンングを展開後、GNビームサーベルを構える。

——カッ——

色々乱れ飛び、作者自宅ごと倒壊・壊滅。

皆は、あいつ等みたいに人の家の中で喧嘩したりするなよな！！

b y 獅子王 凱

第四話 幕間・継承（前書き）

・今回はエヴァ達も殆ど登場しません。主人公強化話にあたるかもしれないです。

・エヴァの年齢は2003年時点で615歳という仮定です。

何と、P V 1 2 0 0 0 突破、ユニーク2000突破ですと！？皆さん、このような駄文を読んで下さり有難う御座います！！これからも精進しつつ頑張りますので宜しくお願いいたします！！

第四話 幕間・継承

あれから、100年の時が経った。え、その間の出来事？相変らずの新旧世界の観光旅行と数え切れないほどの襲撃さ。それでもつて、今、俺達は日本に來ている。後の麻保良学園の周辺だ。勿論、『認識阻害』によつて周囲には俺達が一般的服裝に身を包んだ日本人に見えている。世界樹を見に來たんだが、なんか強い結界に守られている。そのせいか、あれだけの規模の大樹ならば周囲に神社仏閣を作つてもいいだろうに、『行つて見たくても近づけない御神木』という怪談扱いだ。恐らくは何者かの意味によつて、近くに人が寄れないようにしているのだろう。

俺達はその結界を潜り抜けられないか探して、色々調べてみた。すると一応神社は有る事が分かる。

『龍宮神社』

その神社の人間が我々に話してくれたのだから間違い無い。漫画の通りの神社名なのでその人が嘘を付いているという事も無いだろう。たまたま俺達が近くの茶屋で団子や茶を馳走になつていた時にそこに同じくしていた神社の者が、教えてくれた。最初は話を誤魔化していた様だが、俺達の事を害意が有る者じゃないと分かつてくれたのか、教えてくれた。観光で來たのは確かなので害意は無い。害したりしたら色々予想が付かない事になりそうだし。

その後、俺達は西へと向かつた。出来れば神鳴流を見てみたかつたからだ。京に着いた俺達は、神社、仏閣を見て回るといふエヴァ・チャチャゼ口と俺とで別れ、早速神鳴流の道場へと向かつていった。行つてみると道場には何人かの門下生が居た。剣を振るっている。

但し、『氣』を使っている様には見えない。……どうやら、『裏』の神鳴流と『表』の神鳴流とに区別されている様だ。俺は人影の少ない所へと行き、一定以上の『氣』だけを探知するレーダーを出して、探して回る事にした。

因みにこれはレーダーの技術を流用した自作だ。俺も只単に能力で戦っていただけという訳じゃない。頭の良いキャラクターカードを使って、その人の技術力や理解力なんかを借りて勉強もしていた。これも、そんな副産物の一つだ。

それはともかく
閑話休題。

レーダーを見てみると、少し離れた山林に幾つかの反応とその奥に何か凄い『氣』を発見した。氣配を極限まで絶ち、前者の処まで行ってみた。すると、『裏』の神鳴流の技を使って手合わせをしている一団を発見した。……が、余り練度が高くは無い様だ。漫画で桜咲刹那や近衛詠春が使っていたものに比べると余りにもお粗末だ。先ず、『氣』の練り込みが全然足りない。襲撃してきている奴には、この20倍『氣』の練り込みの奴らが沢山居た。どうやらまだ全然修行中の奴等らしい。俺はそいつらの技を『見て盗む』と、近くの無人の山にある岩場に行った。そして、近くの岩を前にして、刀に『氣』を込めると、

「神鳴流……斬岩剣」

の呟きと共に岩に叩き込んだ。すると、果実を切った時の様な音と共に岩が割れた。……俺は改めて刀を握り、無駄な動作を省いて岩に剣を叩き込む。……アバン流刀殺法・大地斬。……同じ様な音がして岩が割れた。……斬岩剣って『氣』を使うぶん、技術が必要としない技なんじゃ……。いや、『氣』で強化した大地斬だと思う

事にしよう。次。

「斬空閃」

『氣』の刃がひのきの木を切り飛ばした。地響きの様な音を立てて、大地に沈む木。続いて刃を高速で振るい、真空刃を飛ばした。秘剣『飛飯綱』。『るる剣』最大のかませ犬『石動雷獣太』の技である。こいつに『氣』をブレンドすれば、斬空閃の出来上がりである。……その後、幾つか技を試した俺は何か引き寄せられる様に奥に向かって歩いていった。先程の『氣』が気になるのである。森を抜けると50メートル四方位の広場があり、其処には一人の爺さんが立っていた。内に秘めた『氣』は莫大な物。だというのにそれは一切表に現さず。まるで流れが一切無い水面のようで、俺は知らずの内にカードをスロットに差し込んで、シシオウブレードをその手に召喚していた。

「……。小僧、何者だ？……いや、今日此処で遭ったのも何かの縁。……剣を抜け。ワシが、お主にとっておきをくれてやろう。……ゆくぞっつ！……！」

そういつた瞬間、爺さんの『氣』が爆発的に増加した！そして次の瞬間爺さんの体は宙を舞っており、空中で何かを踏み締めると爆発的に加速して唐竹を放つ――！

「ぐうつ――！」

俺はその一撃を剣で凌ぐが、一緒に弾き飛ばされた。

……くつ、間違い無い。俺の『力』と一緒に物！？しかもこの爺さん、疾い！そこの剣士なんざ話にならねえぞ――！！

「ワシが終生使って編み出した武技の数々……。見事収得せよ！！
……それが出来ぬその時は死んで貰う！！」

爺さんはそう言うと同時に、刀を下段に構え突っ込んでくる。俺はそれを止めるべく、斜め上から斬り降ろす。が、爺さんは更に加速してそれを避け、手を刀の峰に対し水平に添えて斬り上げてきた。完全な死に体。が、咄嗟に出来得る限りの『氣』を腕に込めて硬気功を行い、その腕を盾にして受け止めようとした。

――閃――

一瞬耐えた俺の腕は、そのまま斬り飛ばされたのである。が、その一瞬で辛うじて体勢を立て直し、そのまま首を斬り飛ばされる事無く、飛んだ腕を掴んで後退する事に成功していた。

……「冗談じゃねえぞ。今は明らかに『飛天御剣流・龍翔閃』。そいつに『氣』を込めていやがる。只でさえ人外流派だったのに更に『氣』まで込めるとか何考えてやがる。」

「ほう、これも避けるか。……腕も既に付いておる。お主、妖怪か。……ふむ、まあ良い。どうせ老い先短い身。妖怪に剣を教えれば長らく使ってくれよう……。御主、名をなんと言う？聞いておこうか」

爺さんが名を聞いてきた。その前に言っていた事にツツコミを入れたいが、まあ、置いておく事にする。それより、この爺さんが只ならない理由が分かった。先程から様子を見ていたが、この爺さん……。

「……俺の名は羽村 明。爺さん、あんた強えよ。こんなに強え人

間、今まで見た事が無い。もつとだ、もつと技を見せてくれ！そうしたらあんたの技、俺が自分の『力』としてあんたが認める様な強い奴に伝授して、細々だが、受け継いでいってやるよ！！」

爺さんはやりと笑うと、裂帛の気合を持って叫んだ。

「ならば！この剣何処まで見極める事が出来るか！！見せて貰うぞ！！！！」

そして爺さんは『氣』を限界まで剣に注ぎ込み、『瞬動』もかくやという速度で突っ込んできた。

「おおおおおおおつつつつつつ！！！！！！」

そして、乱撃が始まった。ちつ、『龍巢閃』か！！俺も自分の『氣』を剣に込めて同じ様に振るう。が、段々と傷が増えてきた。どうやら、俺の剣速よりも迅いらしい。最も傷はすぐに塞がるが。それが終わったかと思うと、『瞬動』で5mほどさがり、剣を地面に突き立てて斬り上げる。すると無数の飛礫がかなりの速度で迫りくる。俺は思わず横っ飛びに避けた。……『土龍閃』……か。そしてもう一本の脇差を鞘から直接飛ばしてきた。それは狙い違わずに俺の手にぶつかり、シシオウブレードを弾き飛ばす。痛っ、『飛龍閃』かよ！！更に先程の様に飛び上がり、『足場』を形成して突っ込んでくる。今度はどうやら刺突のようだ。って、のんきに観察している場合じゃねえ！俺は其処から更に『瞬動』してシシオウブレードの所まで行ってからそれを引っ掴んで移動する。あの形、『龍槌閃』のバリエーションか？

取り敢えず、何時までも受けに廻っていても始まらないので『瞬動』で迫り、左上から右下へ向け、袈裟懸けに斬りつける。が、次

の瞬間背後に斬撃が飛んできた。どうやら避けた時にそのまま超速度で回転しての背後からの斬撃を放たれ、俺はそれをまともに受けた様だ。……『龍巻閃』……。俺はそのまま上下に真っ二つにされ、血と臓物を撒き散らせて、近くの岩に叩きつけられた。

……死ぬほど痛い。……いや、まあ、普通なら死んでいるんだけど。俺はすぐに下半身を上半身に接着し、回復術式を唱える。いや、流石にやばかった。

しばらくしてから爺さんの方を見る。どうやら爺さんは俺が回復するのを待っていてくれたらしい。俺が向き直ると同時に、刀を納めた。が、戦う意志が無くなった訳ではない所を見ると、抜刀術の様だ。可能性としては『双龍閃』。但し、刃と鞘どちらが先に来るのが分からない。因みに『天翔龍閃』という線は無い。あれはあくまでもこちらが使わなくてはいけないものだからだ。……そういう意味では俺はそれを使う自信が無い。『不老不死』では生きるという意味云々が足りないのでは？と思うてしまう。が、そんな事は今は置いておく。今はただ、この爺さんとの戦いに集中する。俺は刀を下段に構え、刀と脚に『氣』を集中する。爺さんは納刀したそのまま、集中する。そして静寂なる中で空気が張り詰められ、二人の剣気が高まっていき……。木の葉がその剣気に挟まれ、音をたてて弾けた瞬間、剣がぶつかり合っていた。そして相手の動きをみて鞘を引き抜き、爺さんが放った鞘に対し自分の鞘をぶつけ合う事で相殺した。

……今のは来る技を事前に知っていたから出来た事で、知らなかったら出来なかった相殺であると言っておく。

……が、しかし、それでも俺の身体はもう一度真っ二つになっていた。……どうやら、今のは自分の鞘に『氣』を込めて、斬空閃の

様に『気』の刃を飛ばして俺の身体を腰で真つ二つにしたようだ。
『気』と『飛天御剣流』の組み合わせは反則的であるというのは分かっていたが、これは予測以上のチートである。どうやらまた復活するまで待つてくれるようなので、さっさと治癒術を使用して復活する事にする。

「度々済まないな。……さて、待たせたな続きを始めようか？」

俺はそう言いながら再び武器を構えた。

「……やはり大概な化け物よのう……。まあ、良い。さてとこれがワシの最大奥義じゃ。これは回避・防御不可能なる業よ。……受け見せい」

最大奥義？……そうか、この人が初代なのか。初代故にこの技を超える技が出来ず、この時点での最大奥義が『九頭龍閃』となる。

……この世界、恐らくはこの流派を継げる人が現れなかった世界なんだろうな。じゃなければこの出会いはずっと無い。何故ならこの爺さんは、仮に明日俺が此処に来ていたなら死体として存在した人だろうから。

……既にこの人には『生き残る』という重要な意思が無い。恐らくは俺が来たから技を継いでもらえと思ったのだろう。生きる為に大切な分の『気』まで総ての力を刀に注ぎ込んでいる。俺にはその意思を止める意思や資格も、ましてや権利や義務も持たない。全力を持って応えるべく、手に持つ得物に『気』を、シシオウブレードの容量限界まで込める。爺さんはそれを見て、一瞬嬉しそうに頬を緩ませ、

「行くぞ、覚悟は良いか？遙か彼方より来たりし鬼よ」

と、問い掛けてきた。そして、裂帛の氣勢をあげたその瞬間、九つの閃光が走り、俺の身体は文字通り八つ裂きになっていた。そして俺の身体が地面に落下したのと同じタイミングで背後から、誰かが倒れる様な音と何かが割れる様な澄んだ音がして、俺は意識を飛ばしたのだった。

俺が目覚めた時、近くにはまだ誰も居なかった。爺さんも倒れたままだ。俺は自分の身体を治癒魔法の力も借りながら再構成して、その後、爺さんを埋葬した。……これで俺以外に『飛天御剣流』を扱える奴はこの世には居なくなってしまった。俺は一通り技を試した後何故、誰も技を習得できなかったのかを納得した。

……ハッキリ言って身体に負担が掛かりすぎる。『氣』で身体を強化しても寿命を縮める様な感じ。更に、それを使うにも『氣』が必要となるから、コストが掛かり過ぎる。でも、人外足る身が使うには良いかもしれない。少なくとも身体の丈夫な奴や、ダメージを気にしなくても良いような種族なら最適だ。実際俺もこいつはかなり使いがあると思っている。

「爺さん。……あんたの……おき、確かに預からせて貰ったぜ。」

……向うでも達者でな」

俺はそんな言葉を残すと、爺さんの折れた剣を墓標にしてその場から立ち去り、たつぷり日本の神社、仏閣、城等を見て御満悦になったエヴァ達と合流して再び旅に出たのであった。

第四話 幕間・継承（後書き）

エヴァ「ほお、今回の私（並行）は台詞すら登場しないのか。貴様
が書いているのがネギま！の二次で有ることを理解しているのか？」

作者「いや、分かつてはいるんだけどね。どこかで『るるうに剣心』
的な部分をだしたいなと思っていたら、ついやってしまったんだ」

エヴァ「き、貴様は……ええい！！リク・ラク・ラ・ラック・ライ
ラック！！来たれ氷精、大気に満ちよ。白夜の国の凍土と氷河を…
『凍る大地』（ウエニアント・スピリトウス・グラキアーレス・エ
クステンダントウル・アーエーリ・トウンドラム・エト・グラキ
エーム・ロキー・ノクティス・アルバエ・・・『クリュスタリザテ
イオー・テルストリス』！！！！」

作者「また……この……オチ……か……い……（ガクッ）」

第五話 新居と邪神銀河観光と契約と（前書き）

お久しぶりで御座います。ここのところ、スランプ＋仕事の過酷さという状況で執筆から遠ざかっていました。取り敢えず少しずつでも思いつつ、ようやくと書き上げられましたので投稿します。今後もし不定期もいい所となりますが、作者はこの程度だと思いつつ、読んでやってください。

第五話 新居と邪神銀河観光と契約と

さて、観光旅行で日本に行ってから更に200年の歳月が過ぎ、その間も無数の襲撃に遭っていた俺達は、現在暗黒大陸の奥地に居た。

「アキ、こんな処まで逃げてきたが今後はどうする？」

エヴァが今後を聞いてきた。

「そうだな。取り敢えずこの辺りの地にでかい城と砦でも建てようかと思っているんだが、どうだ？」

そろそろレーベンスシュルト城を造ろうと思うので、そう答えた。

「城ならパレスがあるではないか。何故わざわざもう一つ造るんだ？」

エヴァが尤もらしい事を言う。確かに新しく造る必要性は無いのだが。

「ダイオラマ球に入れるものをもう少し造ろうと思っているんだが、エヴァは要らないと思うか？」

エヴァは少し悩んでいたが、暫くして溜め息をつく

「……アキの好きにすれば良いだろう。但し、余り時間を掛けずに造ってくれ。……たまにはアキとのゆっくりした時間も欲しいからな」

……こ、この可愛い奴め。

「……分かった。極力フルスピードで済まそう。で、建て終わったらイチャイチャして過ごすか？」

エヴァの顔が耳まで真っ赤になった。

「……うん。そうしょつか？（／／／／／）」

上目遣いで見上げるようにこちらを見てそんな事を言うエヴァ。

ぐはっ、この最終兵器ー（可愛さ的意味合いで）めー！俺のLifeはもう少してゼロだぜー！！

最近、エヴァが『自分が舐められないように』との事で昔の口調をあまり出さなくなった。とても悲しい事だけれど、たまにこうして見せてくれるので逆にギャップがあつて大変結構だ。

俺はシステムデッキから『亜空間物質転送』、武装カード『GNソード？』を取り出し、腹部スロットに差し込み、亜空間を開くと中から大きめの小惑星を取り出す。因みにこの小惑星はエヴァが寝ている間に転移を利用して持ってきた物である。

それを『GNソード？』で解体してブロックにする。そしてそのブロックをAI搭載型の飛行試験型グフとM1アストレイ・シユライク換装型によって組み立てる事で凄い速度で組み上げていく。結果、レーベンスシュルト城は三ヶ月で完成した。

その後50年位、誰も何も来なかった為、何時もの様にチャチャ

ゼロと修行という名の（一方的な）殺し合いをしたり、エヴァとニヤンニヤンしていた訳だが……。やはりと言うかなんと言うか巨大な城が目立ち過ぎたのか、多々の襲撃を受ける事となったのである。いい加減、阿呆どもにはウンザリして来ていたので、いつもの様に薙ぎ倒した後、レーベンスシュルト城をダイオラ魔法球の中に入れて俺達は再び旅に出ることにした。

今回は宇宙に出てみる事にする。因みにナイアさんが監修らしい。不安だが違う事やって機嫌を損ねたくないので泣く泣く、機体召喚カード『アーチャーアリオス』をスロットに通してアーチャーアリオスをだす。そして二人と一体で飛び乗って宇宙へ出て、月の裏側に行つてカードを3枚スロットに入れてナデシコCを出す。入れたカードは機体カード『ナデシコC』システムカード『フォールド系技術』技能カード『マシンチャイルド』。フォールドを使用して以前ナイアさんが目星を付けた星へと出向く。……結構な時間潰しにもなるだろうし。

最初に俺達が来たのは広大な砂漠だけの惑星だった。因みにナデシコCは重力緩和地点に置いて、アリオスで来ている。生物反応はない。修行用に使う為に、ダイオラ魔法球を取り出して砂漠を魔法球の中に取り込む。隣でエヴァが、

「わざわざ他の惑星に来て取り込むなんて……。なんて非常識な作り方をするのよ……」

と、ぼやいているのがとても印象的だった。次に氷の惑星に行った。そこで数千キロ四方を取り込んで次の星へ行こうと思つたら巨大な氷龍に襲われた。その大きさ、実に顔だけで高さ500？。桁違いもいい所だ。重力法則？何それ美味しいの？と言わんばかりのかさ。それがいきなり地面を突き破って出

てくるので凄く吃驚した。

何とか逃げ惑いながら『燃える天空』を全力で放つ。が、表面の氷で出来た鱗が少し焦げただけ。その事実にはエヴァと二人して顔を蒼白にしつつ逃げ出した。お話にならない。ある程度は追ってきたが一定の境界を越えると氷龍は自分の領域を越えたと判断したのか、引き返していった。因みに奴の体長は10kmはあったと言っておく。

「取り敢えず、すぐにこの星を出よう。……こんなのグラディウスもビックリだ」

「そうしょつか。あんな化け物が居るなんて聞いてないよ」

「ケケケ、ドウカンダナ。サスガニアレハナイゼ」

そうして俺達は氷の惑星で文字通り身も凍るような体験をして、全力で離脱したのであった。ああ、その場でのやり取りの直後にアリオスを実体化させて乗り込み、飛び立った瞬間、頭の高さ2500m級の氷龍が現れ、飲み込もうと猛然と襲い掛かってきた事を追記しておく。慌ててアリオスをランザムさせて脱出した。あれは流石に生きた心地がしなかった。流石ナイアさん指定の惑星だと思っただね、マジで。

その後も幾つかの惑星で危険な目に遭いながらも観光旅行、その名も【ナイアさんが勧める、銀河系惑星探査の旅】を終えて、地球に戻って来た時には100年以上が経っていた。

実際に行った惑星数150以上。邪神系のSAN値ガリガリ削られる様な常識外れのバトルをした惑星15個。巨大過ぎる古代の図書館の様にも見える遺跡も有ったよ。俺は兎も角、良くエヴァやチャチャゼロが正気を保ってくれた物だ。それ以外にも避暑地にピッ

タリな惑星とかもあつたが。思わず長居してしまった俺達は何も悪くない筈。

まあ最後に居たのは遺跡の惑星だったわけだが、いきなり巨大なロボットが2機転移してきて戦いが始まったので超々々々長距離転移魔法で逃げてきたというのが実情だ。因みにとても今更だが、『魔力』や『気』は10の30乗というとてもない量だった。地球に有る数ある隠れ家の一つに戻る位は楽勝さ、位には。で、あそこに置いてきた当然ナデシコなんかはもう無いだろうね。さつきカードがはじき出されたし。その件について思っているとエヴァが涙目で、

「何なのよあれは！！！」

と、俺の胸倉を掴んで振りまわし始める。どうやら怖かったようだ。……まあ、普通に狂気を発していたからなあ、あの2機。

「俺に聞かれてもそんなん知るか！！」

取り敢えずそう言いつつ胸倉から手を放させるが、多分平行世界関係だろうなあなんぞと考える。あの特徴的な機体から考えて……リールレスとデオンベオン。そんな事を考えていると、ナイアさんの声が念話と言う形で聞こえてきた。それと同時に何時もの様に俺以外の『時』が凍結する。

『あはははは。どうだった？ 銀河探索の旅は、さ。面白かったかい？』

彼女の声は、笑い声も相俟って随分と愉しげだ。当人は愉しかつたんだろうさ。

「断言する。少なくとも退屈はしなかった。否、退屈なんかしたくても出来なかったさ!!」

思わず声がでかくなってしまったが、これは仕方ないだろう。

『そうだろうねえ。少なくとも僕はそのつもりでプランを作ったんだから。ああ、最後の件だけれど、あれは僕が仕組んだ訳じゃないよ。僕以外の神がたまたま僕のやっている事を見てね、介入してきただ。まあ、あそここの世界が関わるのは僕としては嫌になる事だから金輪際無いと思うよ』

愉しげに、だけれど忌々しげに言うナイアさん。まあ、最も新しき神になる二人が居る世界だもんなあ。この人にとっては厄災以外の何者でもないだろう。

「そうですか。……で、今回はこれだけですか？」

俺の問いに、ナイアさんは一息をつくと、

『つれない反応だねえ。もう僕には慣れちゃったかい？まあいいや。それで用件なんだけれど。君には一つやって欲しい事があってね。

……原作介入、と言っても良いんだけど、正体を隠して赤き翼に参戦して欲しいのさ。簡単だろう？但し、エヴァンジェリンとチャヤゼロとは一回離れて貰う』

「断る。幾らナイアさんの頼みや命令でも、それだけは聞けない」

俺は即答で返事をした。キティやゼロと離れるなんて御免こうむる!!それに対してナイアさんは別に怒るでもなく、淡々と言った。

『なら、代償を払うと良い。代償は一律して僕との遊ぶ時間の延長で良いよ』

……恐らくはこれが狙い。こうして断らざるを得なくして、絶望を喰らいながら少しでも長く遊ぶんだろう。俺は覚悟を決めて頷いた。

「……わかった。いいだろう。幾ら代償が要るんだ？」

『今回は初回限定サービスで500年で良いよ』

「……これではぼ一万年に逆戻り、か。仕方が無いな。エヴァと離れる位ならそれで良い」

俺は目を瞑り、これからの苦難を思い浮かべつつ言った。

『あはははは。まいどあり。次回からは千年単位だからね。覚悟して置くと良いよ』

そう聞こえたのを最後に念話は途切れ、『時』は動き出した。俺の方を見たエヴァは、

「ナイアルラトホテップ？」

と聞いてきた。俺は静かに頷く。

「ああ。奴が、今回の旅行の感想を聞きに来ただけさ」

「……アキがそう言うならそうなんでしょうね……。でも、もしあいつが何て言ったとしても、私達はアキから離れないから覚悟なさいよね」

胡坐を掻いた俺の脚の部分に座って、俺の撫でていない方の腕を

両手で抱き締めつつ、こちらを向きながらそう言うキティを撫でつつ、笑いかけながら額に軽くキスをして頷くのだった。

……邪神とのこの約束は、誰にも知られなくて良い、そう、まだ、誰にも……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4013s/>

魔法先生ネギま！～鋼の戦士～

2011年9月22日01時42分発行